

みなさん、こんにちば。久留米大学附設中学校・高等学校へのご入学おめでとうございます。保護者の皆様も、大変お喜びと存じます。心よりお祝いを申し上げたいと存じます。

みなさんのご入学は、また、みなさんを久留米大学という大きな集団にお迎えするということでもありますので、学校法人久留米大学、大学、並びに、附設高校同窓会、附設中学・高校後援会の役員の方々が、来賓として、お祝いに来られています。ご来賓の皆様には、お忙しい中を、新入生のために、ご来校いただき、大変ありがとうございます。なお、神代正道理事長、永田見生学長、長谷川房生同窓会長、藤崎敬介後援会長の方々からは、後ほど、お祝いの御言葉をいただくことになっております。

さて、この場には、附設中学校の新生一六四名、附設高校の新生一九七名の皆さんが集っています。このうち、一四五名の諸君は、附設中学校からの進学者ですので、三年前のわたくしの入学式の式辞を覚えているかもしれません。あのときは、東日本大震災からまだ一月も経っていませんでした。文字通り、未曾有の複合的な大災害であって、マグニチュード九・〇の海底地震や余震、それらに引き続く大津波によって、多大の人的被害が生じた上に、さらに、福島第一原子力発電所の原子炉三号基の水素爆発、一号機から四号機までの原子炉の炉心溶融と放射能放出が発生しました。高校から新しく附設のフアミリーに加わる皆さんも、恐らく中学の入学式の式辞で東日本大震災のことを耳にされたと思います。中学入学生の皆さんは、小学校の中学年だったので、怖い、恐ろしい、お気の毒、といった感情が先に立ち、災害に遭われた方たちとの共感と支援の気持ちを一生懸命表そうとしていたと思います。

あの未曾有の大災害からの復興はまだまだ十分ではないのが事実といわざるを得ないわけですし、その一方で、内外で新しい事態がいろいろと起き、激しい時代の変化は一刻も休んでくれません。東日本大震災という大災害の詳細な分析や、恐らく、非常に大きく深いものであるはずの世界史的な本当のインパクトについても、その確認の試みさえ、まだ、手つかずのままです。ただ、日本を廻る予定調和の世界というものは存在しないということだけは、誰の目にも明らかになったと言えると思います。

日本を廻る予定調和の世界というようなものとは何だったか。本来あるはずがないもの、つまり、幽霊のようなものですが、大体の姿かたちは、国内の新聞論調などを振り返ってみると、見当が付きます。それは、要するに、日本と日本の外の世界とは全く別のものだという、日本独自の思い込みのことです。難しい表現になることを承知で、敢えて詳しく言うと、この思い込みは、基本的に三つの要素に分解できます。つまり、第一に、日本というのは自律的な時空における構造体（末尾注）である、第二に、日本の外に世界という時空における構造体があり、第三に、これが予定調和の原理とでもいうべきものですが、日本

という時空の構造体と日本の外の世界という構造体の間には非対称的な関係が存在するが、日本という構造体は、この関係によって本質的な変更を受けることがないまま、存在し続けるものである、の三要素です。入学式の式辞は、いずれ附設のホームページに貼り付けてもらいますので、気になった向きは、それで確かめてください。

さて、話を元に戻して、東日本大震災は予定調和という日本の思い込みにも、とどめを刺してしまいました。それはどういうことか。あの大災害からの経過を見てみると、日本の中だけですべてが推移してきたわけではないことはわかると思います。三陸の浮きドックがシアトルの沖合に現われたり、ハワイ周辺に漁船が漂っていたりして、太平洋は一体だということが実感としてわかりました。原子炉災害に関しては、非常用電源が二個とも近接して設けられていたとか、国産の検査ロボットがなかったとか、関係者の想像力の著しい偏りを示す例がたくさんありました。これらはごく表面的なことに過ぎないのですが、もっと詳しい分析を述べるには、丁寧な議論が欠かせない上に、大震災から十分に時間が経っていないので、卑怯なようですが、これ以上の説明はしません。

とにかく、「予定調和の世界」とは対極的なものとして、「本来の世界構造」を三点ほどにまとめましょう。つまり、第一に、「日本」対「世界」という対立構造は成り立たないこと、第二に、「世界」と言っても、実は、一様ではなくて、相互に干渉しあう多種多様な小部分から出来上がっていること、そして、第三に、「日本」は、そういう小部分の一つとして、「日本」に深く関わっている我々にとっては特別なものではあるが、世界全体から見たときには無条件に何か特別なものでなければならぬという理由があるわけではないこと、の以上三点です。

もちろん、この三点は、東日本大震災よりずっと以前から変わらないことではありませんが、ただ、第二点として述べた、世界を構成する多種多様な小部分の相互干渉が、かつては余り強くなく、どれか一つの小部分に着目すると、着目された小部分、例えば、「日本」とその残りの小部分だけを集めたものとして世界が分けられるとしてもそれほど不自然にも感じなかった時期が長かったということだと思えます。

そこで、皆さんですが、今から十年後二十年後に実際に社会に出て活躍するときには、予定調和型でなく、「本来の世界構造」を自然に身に着けて振る舞っていたらいいと思います。しかし、せっかく日本で育った以上、やはり、その際、問題になるのは、「日本」が「世界全体から見たときには無条件に何か特別なものでなければならぬ」という理由があるわけではない」というところでしょう。ポイントは「無条件に」ということです。言い換えると、世界全体から見て「日本」が特別なものになること、つまり、「日本」の存在によって「世界全体」が一層よくなるということが、皆さんの努力や活躍によって確かなもの

にできるはずのことです。皆さんは、そういう役割を担っているという意識のもとで、これからの日々を過ごして行っていただきたいと思います。

ここで、また、念のために付け加えますと、皆さんが「世界貢献」のために他の国に移住しなければならないということではありません。日本の国内にいても、また、ごく身近なことの処理に従っていても、その仕事の結果が地上はるか彼方に実は及んでいるのだ、ということですよ。身近のことしか見えていなくて、したがって、内輪のことだけを果たしているつもりでも、実は、とんでもなく遠方の誰かの邪魔になっているかも知れません。もちろん、別の誰かの役に立っているかもしれない。つまり、どこにいても、誰であっても、何がしか「世界全体」と関わっています。

結局、皆さんは、どこにしようと、また、どんな仕事をしようと、実は、世界を相手にしているのだと覚悟を決めて堂々と振る舞えるように、自らを鍛えるしかありません。この先十年二十年という、附設で過ごす時間を大分超えてしまいますが、まず、附設で基礎力を徹底的に鍛え上げてほしいと思います。基礎力とは、学力だけではありません。何よりも、人間力です。もう少し、詳しく述べると、皆さんには、

国家・社会に貢献しようとする、為他の気概をもった誠実・努力の人物

としての成長を期待しています。実際、このような人物の育成こそが附設の建学の趣旨で、わたくしたちの指針となっています。

この言葉自体は、高校創設時の校長板垣政参先生によるもとの言葉を中学校設置時の校長原巳冬先生が補われたものです。間もなく半世紀にもなろうという文言ですから、「国家・社会」は、どちらかと言えば、「日本」対「世界」の感覚が籠められていたと思います。では、「国家・社会」を「世界」に改めたらいいか、と言うと、そういうものでもありません。実際、皆さんのほとんどは、日本の国内で主に働くことになるでしょう。その上、どこにしようと、日頃の仕事の結果が、直接間接に、また、大小を問わず、世界中に影響を及ぼす時代になっています。また、日本が世界に貢献するという場合も、日本で遂行された種々の仕事の積み重ねが、このことの支えになります。最初から、ことさらに世界を目標として意識することに意味があるわけではないことがわかります。しかも、人間として、もつとも基本的なこと、それは、そのまま、世界中に対して通用します。為他の気概をもった誠実・努力の人物、つまり、世のため人のために働こうという強い意志のもとに、誠実に仕事に励むということは、わがまま一杯、まさに自己中の思春期の最中に、こういうことを強く意識できたことは、後々、皆さんの魅力のもとになるはずですよ。

附設生としての皆さんは、人々の幸せのために働こうとするためにも、附設ならではの機会を存分に生かしてください。志の高さを支えるためにも、しかるべき進学先を実現することには貪欲であってほしいと思います。実際、上でも言いましたが、附設は、皆さんが、勉強を通して基礎中の基礎を身に着け、その後の一生を通じての自己研鑽に備えるところです。附設における学習姿勢や生活習慣に関しては、しかし、校長は具体的なことは言いません。先生たちを信頼し、そして、皆さん自身もお互い同士で高め合ってください。

わたくしからは細かい教科の話は致しませんが、二点ほど、皆さんにぜひ心掛けてほしいことがあります。第一点としては、統計的なものの見方を身に付けてほしいと思います。これは大きな数を扱うときには欠かせませんし、統計の文脈に載せて初めて数値の信用度が確かめられます。第二点としては、世界史を物語として大局的に把握してください。物語として、と言っても、日本で暮らしている者にとつては、せいぜい一六世紀の種子島辺りから、あるいは、多少遡って、元寇や倭寇の時代からで十分でしょう。当然、教科「世界史」としての把握とは全く違います。特に、九州にいと、瀬戸内海の西側にいるというだけで、関西や関東の人間とは違う物語が見えるはずです。あの校長は、入学式の式辞で変なことを言った、気になるー、と、皆さんに思っていたら、うれしいのですが。

さて、以上を要約しておきましょう。東日本大震災から始めて、日本は、世界の一部分であるが、よい世界の実現に貢献しようとする特別な部分になるかどうかは、皆さんの働きに拠るので注意しました。そして、実際、どこにいて、どんな仕事にしても、それは世界全体に何らかの影響を及ぼす時代ですから、他人の、つまり、世界の幸せにつながるよい仕事をするからこそが、附設の建学の趣旨だ、と述べました。その上で、附設の生徒である以上は、先生を信頼し、友だち同士高め合いながら、勉学に励んでください、と言います。さらに、教養上のスケールのためなのですが、統計的な発想を身に着けよ、と言います。また、近世以降の世界史の物語を大づかみにせよ、と付け加えました。

新入生皆さんの附設生活が楽しく実りあるものであることを念じて、式辞を終わります。

平成二六年四月八日

久留米大学附設中学校・高等学校 校長

吉川 敦

(注) つまり、「昔から今まで(＝時間)。ある地域(＝空間、例えば、主に、日本列島の中)で、他からの影響を余り受けることなく(＝自律)、在り続けたもの(＝構造物)」